

(治安維持法同盟神奈川本部『不屈 491号 神奈川版』2015年5月刊4-5頁)

イタリア・ファシズム下の山宣事件

—ムッソリーニに暗殺されたマッテオッティ議員

退役生活が10年を過ぎ、人生最後の生涯局面と自覚しての日々を送っているこの頃、現役時代に読もうと手元にして、そのままツンドクになっていた本を読むことが折々あるようになった。その一つとして、文芸春秋社1987年刊・マクスガロ著・木村ひろし訳『ムッソリーニの時代』全437頁を読んだ。

ムッソリーニの時代

1883年7月、ローマニア州(州都ボローニャ)プレダッピオ村で鍛冶屋の父、学校教師の母のもとに生まれ、1945年4月、ミラノからスイスに向けて逃亡中にコモ湖近くの寒村ドンゴで反ファシストのパルチザンに捕まり処刑されたベニート・ムッソリーニの評伝である。

この評伝は、1922年10月のファシスト「ローマ進軍」=武装蜂起をもって政権につき1926年12月の全政党解体などの弾圧法=「国家防衛法」で全権を掌握、抵抗する国民を暴圧で抑止し、同調する国民を扇動で一層熱狂させながら「ローマ帝国の再興」(イタリア式「八紘一宇」!)を呼号して侵略を進めた(イタリア国王1936年5月エチオピア皇帝に就任 1939年4月アルバニア国王に就任)ムッソリーニの評伝であり、それは侵略と殺戮の第二次大戦を導き出す途においてドイツ・ナチズム、日本・天皇制ファシズムに先だったムッソリーニの生涯履歴からして当然に20世紀前半のヨーロッパ史であり、世界史でもある。

弾圧下の裁判

著者のガロは、フランスの歴史家であり同時にフランス社会党の政治家でもあるが、特に社民潮流を持ち上げるといった党派的叙述はしていない。例えば次の叙述にみるように、真摯に歴史真実を明らかにする立場を貫く叙述である。「…共産党だけがあらゆる弾圧にもかかわらず、イタリアで現実に行動を続けている唯一の政党であった。…特別法廷で有罪判決を受けた四千六百七十一人のうち、四千三十人が共産党員ないしそのシンパであった。…一九二八年五月、政府は共産党中央委員会の公開裁判を開始した。被告の一人アントーニオ・グラムシに対して、検察官は「この人物の頭脳を二十年間、働かさないことが必要である」と述べた… こうした裁判、それに続く投獄によって、反政府運動は様々な手痛い打撃を受けた。…そこで闘争をどう遂行すべきか、つまり実力を行使するか、宣伝でいくかという点が先ず問題となった。共産党は後者を選んだ。…」(本書237-238頁)

安倍晋三の暴走ぶり

さて本書全体は、今の日本で安倍晋三が極右政治で暴走、それへの抵抗闘争も様々な新様相のもとで執拗に展開されてはいるが、しかし安倍の改憲政治を是とする民衆の動きも活発で、集団的自衛権行使の事実を先行させ自衛隊員の死等を招いて更なる戦争への熱狂が組織されかねない状況—明文改憲も実現されかねない状況と符合する史実が多く、たいへん読んで刺激を受ける。たとえば、ムッソリーニが労働組合の粉砕を急務として1926

年 4 月に具体化した協調組合法を賛美する次の上院演説は、アベノミクスの企業にとって世界一良い環境作りの掛け声―ネオリベのトリクルダウン思想を、想起させるものだった。「…資本主義者はすぐれた組織者であり、しかもこの人たちに数万の労働者の運命、賃金それに福祉がかかっているのである。これら労働者が求めるものは一体何か？実業家の成功である。その成功こそ、まさに国家の成功なのである。」(197 頁)

安倍晋三の「戦後レジームからの脱却」つまり戦前体制への復帰の理念との関連になるが、天皇制ファシズム下の山宣暗殺事件(1927 年 3 月 前年の治安維持法死刑化などの勅令による改訂を議会が承認した夜に極右集団員＝黒田保久二によって労農党代議士＝山本宣治が刺殺された事件)に符合するマッテオッティ暗殺事件のことを本書(Ⅱ・8 壊滅の賭け・「マッテオッティ事件」)で私は初めて知った。以下に概要を紹介する。

マッテオッティ事件

ファシスト軍団の「ローマ進軍」の実力行使で実現したムッソリーニ内閣は、下院のファシスト議員 35 人の少数でありながら議会の過半数信任を獲得した政権であった。そこで 1923 年 7 月、ムッソリーニは、全国投票で 25%得票した政党に下院議席の 2/3 を与えるという選挙法改革を武力弾圧で脅かしながら強行した(下院 303:40 票で可決)。

1924 年 4 月の新選挙法による総選挙の結果は、ムッソリーニ与党議員が 375 人(うちファシスト 275 人)、野党は人民党 39、社会党 24、共産党 19。ファシスト公認候補の得票 435 万票、野党側 300 万票であった。5 月 30 日の新議会冒頭に、総選挙の無効と、それに伴うファシスト議員の大量除名を求める決議案が、社会党議員のラブリオーラとマッテオッティから提案された。マッテオッティの発言要求が認められ、彼は野次を物ともせず演説を始め、2 時間(野次を除いた正味時間は 30 分)総選挙での違法行為を逐一明らかにし、ファシスト党議員に対して吐き出すように鋭くやりこめた。6 月 3 日、マッテオッティは再び演壇に立ち、今度は直接にムッソリーニに攻撃を加えた。しかしムッソリーニのまくしたてる演説で「君は背中に鉛の弾丸を見舞われたいのか？われわれはそれをやってのける勇気がある」との言辞が大喝采を浴びるなどの情景を経て、6 月 7 日、361:107 票で、下院は政府全面信任の決議をする。

事件は 6 月 10 日に起こる。登院するはずのマッテオッティが失踪したのだ。じつはその日の午後早く、彼はテヴェレ川沿いを議会に向けて歩いていて、途中停車していた車から男たちが飛び出し、彼に襲いかかった。彼は殴りつけられた挙句、車の中に引きずり込まれた。彼は刃物で刺された。車の中に血がしたたり落ちた…

過去のあやまちを繰り返すな

山宣は 1 年余の議員活動の中で、3.15 事件の暴圧を批判する議会質問を行うなどの奮闘をしたが、死刑法への治安維持法改訂には反対演説の準備をしながら、できないままに殺された。マッテオッティは、ファシズムとムッソリーニを批判する演説を二度行った直後に殺された。しかし、ファシズム・軍国主義の専制の犠牲に成ったことは共通である。こういう歴史を繰り返してはならない。絶対に!! 下山房雄(同盟員 海老名市在住)